

高校生・大学生およびその親の年代を対象とした ビッグファイブ性格テスト作成の試み

Development of new Big Five personality inventory for high school students, university students, and their parents' generation

河野和明*, 高田琢弘*, 伊藤君男*, 高橋晋也*, 三宅理子*
樋町美華*, 山川香織*, 松尾朗子*, 奥田達也*

Kazuaki KAWANO, Takuhiro TAKADA, Kimio ITO, Shin'ya TAHAHASI, Riko MIYAKE
Mika HIMACHI, Kaori YAMAKAWA, Akiko MATSUO, Tatsuya OKUDA

キーワード：ビッグファイブ性格テスト，高校生，大学生，中高年

Key words : Big Five personality inventory, High school students, University students,
Middle age

要約

本研究の目的は、新たなビッグファイブ (Big Five) 性格テストを開発し、その信頼性と妥当性を検討することであった。その際、高校生、大学生、およびその親の年代の、3世代の得点を比較した。15歳から25歳の若年群、45歳から60歳の親年代群の計1500人に性格測定用に策定した50項目を投入して因子分析を行った。ビッグファイブの各特性についてそれぞれ5つの項目を選定し、他の2つのビッグファイブ性格テストと比較された。全体に、本研究で作成した尺度の妥当性と信頼性がおおむね支持され、ビッグファイブ性格テストにおける得点の年齢による変化と性差に関するこれまでの知見が一部確認された。

Abstract

This study aimed to develop a new version of the Big-Five personality inventory and verify its reliability and validity, and also examine the age and gender differences by comparing results from high school students, university students, and their parents' generation. Fifty items were administered to 1500 people whose ages ranged from 15 to 25, and 45 to 60 years old. Then factor analyses were made. 5 items on each factor of Big-Five personalities were chosen and compared to other two Big-Five personality tests. Although discriminations of factors were relatively weak, the validity and reliability of this new scale were supported.

* 東海学園大学心理学部心理学科

Previous findings on age and gender differences in Big-Five personality scores were partially confirmed.

問題

現在, 実証的な心理学研究の特性論的アプローチにおいては, 性格のビッグファイブ(Big Five) 説 (Goldberg, 1990, 1992) が幅広いコンセンサスを得ている。この説は, 従来の質問紙法を用いた性格研究を総合した結果, 安定して認められる性格因子が, Extraversion (外向性), Agreeableness (協調性, 調和性, 愛着性など; 以下, 協調性と表記), Conscientiousness (勤勉性, 誠実性, 統制性など; 以下, 勤勉性と表記), Neuroticism (神経症傾向, 情緒不安定性, 情動性など; 以下, 神経症傾向と表記), Openness to Experience (Openness; 知性, 開放性, 遊戯性など; 以下, 開放性と表記) の5つ (以下, ビッグファイブ) であるとするものである。

本邦においても, 和田 (1996) の Big Five 尺度, FFPQ (FFPQ 研究会, 1998, 2002), NEO-PI-R (下仲他, 1999), 主要5因子性格検査 (村上・村上, 1999), FFPQ-50 (藤島他, 2005), TIPI-J (小塩他, 2012) など, さまざまなビッグファイブ性格テストが作成されている。

本研究では, 特に心理学授業等における教材や性格検査のデモンストレーションとして供したり, 大学生の卒業研究等で簡便に使用したりすることを念頭に新たなビッグファイブ性格検査の作成を試みる。その際, これらの用途のため, 使用する項目文は平易であり, 特性語の列挙でなく文章であること, なるべく逆転項目を作らないこと, 最終的に採用する項目が性格5因子それぞれ5項目程度の分量となることを目指した。

特に卒業研究等の調査において取り上げられる年代には, 大学生はもちろん, 調査者の出身校等の協力を得ることによって高校生を対象とすることも多い。また, 養育態度が子に及ぼす影響を検討したり世代間比較をおこなったりするため, 大学生の親に協力を得て親の年代を調査対象とすることもある。そこで, 本研究では測定尺度を作成した上で, 比較のために投入する2種のビッグファイブ性格検査の結果とともに, 高校生および大学生の年代とその親の年代を対象として基本的な統計量を把握し, 年代間の差異を検討する。また, 18-25歳の年齢層については職業状況等による得点の差も付加的に検討する。

方法

対象者 調査はインターネット調査会社 (株式会社クロス・マーケティング) に委託し WEB 上で実施された。調査対象者は, 男女各 500 名の若年群 (15~25 歳) と男女各 250 名の親年代群 (45-60 歳) から構成され, 計 1500 名 (男性 750 名, 女性 750 名) の回答が収集された。回答者の

平均年齢は若年群で 21.15 歳 ($SD = 2.91$)、親年代群で 52.09 歳 ($SD = 4.52$) であった。

質問内容 回答者に呈示された質問は、フェイスシート項目と性格測定用の項目から構成されていた。性格測定用の項目には、本研究で新たに作成した項目と既存の性格検査の項目があった。

(a) フェイスシート項目 フェイスシート項目は、性別、年齢、住所の都道府県名、婚姻状態(未婚・既婚)、職業、在籍学校を含んでいた。職業は 14 カテゴリ [「会社勤務 (一般社員)」, 「会社勤務 (管理職)」, 「会社経営 (経営者・役員)」, 「公務員・教職員・非営利団体職員」, 「派遣社員・契約社員」, 「自営業 (商工サービス)」, 「SOHO」, 「農林漁業」, 「専門職 (弁護士・税理士等・医療関連)」, 「パート・アルバイト」, 「専業主婦・主夫」, 「学生」, 「無職」, 「その他の職業」] からひとつを選ぶ形式で取得された。同様に在籍学校は、9 カテゴリ [中学校, 高等学校, 高等専門学校 (高専), 各種学校・専修学校, 短期大学, 大学, 大学院, その他] からひとつを選ぶ形式で取得された。

(b) 新たに作成した性格特性測定項目 5 因子性格理論に基づき、先行研究 (村上・村上, 1999; FFPQ 研究会, 2002; 小塩他, 2012 など) を参考に、性格の自己認知 (「～な性格です」など)、好みや志向 (「人とつきあうのが好きだ」など)、スキルや能力 (「面白いアイデアを出せる方です」など) の点からビッグファイブの各特性を表現すると思われる項目文をそれぞれ新たに多数作成した。その上で、内容の重複や表現を検討して項目を取捨し、各 10 項目を選定して測定項目とした。測定にあたっては、各項目に対し、あてはまる程度を 5 件法 (1 = あてはまらない～5 = あてはまる) で尋ねた。

(c) 既存の性格検査項目 これに加えて、既存のビッグファイブ尺度との併存妥当性を検討するために、小塩他 (2012) の TIPI-J の 10 項目 (以下, TIPI) および和田 (1996) の特性語による Big Five 尺度の 60 項目 (以下, 特性語 BF) を投入した。TIPI は 7 件法 (1 = 全く違うと思う～7 = 強くそう思う)、特性語 BF も 7 件法 (1 = まったくあてはまらない～7 = 非常にあてはまる) で評定を求めた。(b) (c) とともに、これらの性格測定用の項目の呈示順は回答者ごとにランダム化されていた。

倫理的配慮 本研究計画は東海学園大学研究倫理委員会の承認を得て実施された (受付番号 2019-5)。調査協力者は研究参加および結果の公表について同意のうえで自発的に調査に参加していた。

結果と考察

項目の因子分析および尺度作成

本研究で作成した50項目に対して回答者の男女ごとに因子分析（主因子法）を行ったところ、男女の因子構造はほぼ同一であった。そこでこれ以降、男女込みのデータで因子分析を行った。5因子解を前提に因子分析を繰り返し、項目を取捨し、最終的に各因子につき5項目を採用した（説明率：第一因子 32.9%，第二因子 10.2%，第三因子 10.2%，第四因子 10.2%，第五因子 10.2%）。項目に対するパターン行列を示す（Table 1）。

Table 1. TBF の尺度項目に対する因子分析の結果；プロマックス回転後の因子パターン（主因子法5因子解）

項目	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
友達を作るのがうまいと思います	.881	.029	-.049	.023	-.012	.726
友達がたくさんいます	.863	.023	-.029	-.053	.029	.704
社交的な人間だと思います	.837	-.002	-.026	.021	.007	.698
気軽に話ができる人がたくさんいます	.786	-.046	.022	-.024	.065	.695
アクティブな性格です	.614	-.027	.174	.069	-.034	.549
いろんな事に不安になりやすい性格です	-.032	.850	.003	-.037	.050	.751
日常のいろいろなことを気にやむ方です	-.001	.781	.051	.038	-.035	.613
ちょっとしたことも気にします	.021	.777	.010	.093	.003	.626
どちらかというと心配しやすい性格です	-.009	.773	-.023	.066	.042	.631
動揺することが多いです	.010	.701	-.039	-.085	.053	.496
知的好奇心が強い性格です	.001	-.044	.829	-.038	-.048	.616
さまざまなものに興味があります	.048	.032	.824	-.126	.005	.627
新しい情報にふれるのが好きです	-.017	.028	.753	-.051	.005	.521
学ぶことや知ることが好きです	-.122	-.034	.664	.145	.039	.508
情報感覚が高い人です	.185	.016	.470	.175	-.113	.412
ものごとをきちんとやるのが得意です	-.016	-.091	.018	.770	.039	.626
几帳面な方だと思います	.000	.119	-.054	.730	-.124	.438
まじめにやるのが得意です	-.169	-.028	-.033	.660	.269	.570
細かいことまで計画を立ててやる方です	.139	.130	-.016	.655	-.206	.386
やり始めたことは投げ出さない性格です	.047	-.138	.053	.532	.112	.428
みんなに合わせて何かをやるように心がけています	.090	.048	-.103	-.019	.722	.524
相手のペースにあわせる方です	-.070	.064	-.044	-.097	.691	.381
チームワークを大事にしています	.245	-.077	-.048	.020	.639	.591
人の気持ちをいつも考えて行動しています	-.028	.017	.133	.049	.572	.446
性格的に、誰かの役に立ちたい気持ちがある方です	.034	.100	.284	.010	.421	.441
因子間相関						
外向性						
神経症傾向	-.224					
開放性	.526	.083				
協調性	.372	.106	.558			
勤勉性	.493	.233	.489	.551		

第一因子には、「友達を作るのがうまいと思います」「友達がたくさんいます」などの項目が高い負荷を示し、これらはビッグファイブの外向性に対応する項目と考えられた。以下、第二因子には「いろんな事に不安になりやすい性格です」「日常のいろいろなことを気にやむ方です」等が、第三因子には「知的好奇心が強い性格です」「さまざまなものに興味があります」等が、第四因子には「ものごとをきちんとやるのが得意です」「几帳面な方だと思います」等が、第五因子には「みんなに合わせて何かをやるように心がけています」「相手のペースにあわせる方です」等がそれぞれ高い負荷を示した。したがって、第一因子から順に、外向性、神経症傾向、開放性、勤勉性、協調性を示すものと考えられた。ただし、既存の尺度（特性語 BF）の結果（和田, 1996; 齊藤他, 2001）と比べ因子間相関が比較的高い因子対が多かった点は、因子の弁別性が弱いことを示唆するものと思われた。

一方、それぞれを尺度と見なした場合の α 係数は、外向性 .91, 神経症傾向 .89, 開放性 .84, 勤勉性 .80, 協調性 .79 であり、高い一貫性を示した。また、当該項目を除いた合計得点に対する各項目の相関係数は .51~.80 であった。G-P 分析を行ったところ、すべての項目に高い弁別力が認められた。 α 係数が当該項目除外前より増大する項目は見られなかった。これらの結果から、5 因子それぞれについて選択した 5 項目がビッグファイブ尺度として妥当であると判断し、項目の合計得点を各性格特性の得点とした。この尺度を以下、暫定的に TBF (Tokai-Gakuen Big-Five test) と略称する。

既存の検査との相関

TIPI および特性語 BF と TBF との相関係数行列を Table 2 に示す。

Table 2. TIPI および特性用語 BF と TBF との相関係数行列

	TIPI					特性語BigFive				
	外向性	神経症傾向	開放性	勤勉性	協調性	外向性	神経症傾向	開放性	勤勉性	協調性
外向性	.726**	-.381**	.412**	.300**	.246**	.792**	-.349**	.564**	.221**	.385**
神経症傾向	-.264**	.676**	-.171**	-.261**	-.097**	-.275**	.822**	-.144**	-.206**	-.191**
TBF 開放性	.281**	-.223**	.498**	.225**	.213**	.393**	-.055*	.683**	.162**	.291**
勤勉性	.137**	-.221**	.229**	.535**	.280**	.281**	-.006	.466**	.577**	.345**
協調性	.199**	-.078**	.114**	.182**	.476**	.388**	.057*	.336**	.213**	.513**

* $p < .05$, ** $p < .01$

TBF の各性格尺度は他の性格検査の対応する性格尺度との間に、.47~.82 の相関を示した。既存のビッグファイブ尺度間の相関をみても、海外および本邦の尺度でおおむね .40~.85 程度なので（参照；大野木, 2004；小塩他, 2012）、従来のビッグファイブ尺度で確認されてきたと同程度の尺度間相関が得られたと考えられる。すなわち、併存的妥当性については他尺度間で従来

示されてきた程度の妥当性が示されたと考えられる。同時に、対応する性格尺度以外の性格尺度との間の相関には、対応する尺度間の相関を上回るものはなかった。これは一応の弁別妥当性を示すものと言えるが、TBFの外向性と特性語BFの開放性 ($r = .56$) やTBFの勤勉性と特性語BFの開放性 ($r = .47$) など、対応する性格尺度以外の尺度との間にも比較的高い相関が散見された。このことは、先の因子の弁別性の問題とあわせ、TBFの弁別的妥当性が若干低いことを示唆する。

性差および年代群間の差

高校生、大学生、親年代の3群で回答を比較するため、在籍学校で高等学校および高等専門学校（高専）を選択した回答者を高校生群 ($n = 140$; 男性76名, 女性64名) とし、各種学校・専修学校、短期大学、大学、大学院を選択した回答者を大学生群 ($n = 332$; 男性195名, 女性137名) とした上で、45歳以上の回答者すべてを親年代群 ($n = 500$; 男性250名, 女性250名) とした。高校生群の平均年齢は16.23歳 ($SD = 0.92$)、大学生代群は20.38歳 ($SD = 1.82$) であった。15~25歳の回答者 ($n = 1000$)、特に18~25歳の回答者には多くの社会人が含まれていた。

Table 3. 性（男性・女性）×年代群（高校生群・大学生群・親年代群）で示したTBF, TIPIおよび特性用語BFの平均尺度得点（男女込みも示す）；（ ）は標準偏差

検査	性格特性	性	高校生群	大学生群	親年代群
TBF	外向性	男性	14.21 (5.60)	14.44 (5.60)	12.60 (4.45)
		女性	13.83 (5.46)	13.69 (5.54)	12.81 (4.63)
		男女込み	14.04 (5.52)	14.13 (5.58)	12.71 (4.54)
	神経症傾向	男性	18.13 (4.45)	18.24 (4.58)	16.36 (4.48)
		女性	19.64 (4.08)	19.22 (3.98)	17.03 (4.39)
		男女込み	18.82 (4.34)	18.64 (4.36)	16.69 (4.45)
	開放性	男性	17.54 (4.67)	18.78 (3.98)	16.42 (3.60)
		女性	17.77 (3.69)	17.56 (3.85)	15.97 (4.17)
		男女込み	17.64 (4.24)	18.28 (3.97)	16.20 (3.90)
勤勉性	男性	15.68 (4.19)	17.07 (4.16)	16.90 (3.39)	
	女性	16.47 (4.02)	16.91 (3.94)	16.80 (3.51)	
	男女込み	16.04 (4.12)	17.00 (4.07)	16.85 (3.45)	
協調性	男性	16.59 (4.12)	17.81 (4.29)	16.32 (2.98)	
	女性	18.22 (3.87)	18.43 (3.60)	17.12 (3.14)	
	男女込み	17.34 (4.07)	18.06 (4.02)	16.72 (3.08)	

Table 3 (続き)

検査	性格特性	性	高校生群	大学生群	親年代群
TIPI	外向性	男性	7.20(3.02)	6.82(2.78)	7.08(2.42)
		女性	7.17(3.09)	6.88(3.13)	7.50(2.46)
		男女込み	7.19(3.04)	6.85(2.93)	7.29(2.45)
	神経症傾向	男性	8.53(2.67)	8.36(2.57)	8.00(2.28)
		女性	8.58(2.52)	9.01(2.42)	8.28(2.29)
		男女込み	8.55(2.59)	8.63(2.53)	8.14(2.29)
	開放性	男性	8.68(2.76)	8.12(2.52)	8.09(1.99)
		女性	8.09(2.71)	7.07(2.57)	7.45(2.24)
		男女込み	8.41(2.74)	7.69(2.59)	7.77(2.14)
	勤勉性	男性	6.32(2.75)	6.97(2.55)	8.18(2.22)
		女性	6.84(2.58)	7.00(2.32)	8.20(2.22)
		男女込み	6.56(2.68)	6.98(2.45)	8.19(2.22)
	協調性	男性	9.30(2.50)	9.33(2.42)	9.32(1.89)
		女性	9.30(2.26)	9.45(2.21)	9.73(1.84)
		男女込み	9.30(2.39)	9.38(2.33)	9.52(1.87)
特性語BF	外向性	男性	45.59(12.54)	46.48(15.05)	46.67(11.44)
		女性	48.02(13.66)	47.07(15.14)	49.30(11.56)
		男女込み	46.70(13.07)	46.73(15.06)	47.99(11.56)
	神経症傾向	男性	54.89(14.19)	54.78(15.28)	49.80(12.86)
		女性	56.59(12.03)	56.04(12.61)	51.23(12.72)
		男女込み	55.67(13.23)	55.30(14.23)	50.52(12.80)
	開放性	男性	51.13(13.21)	51.03(12.94)	49.04(9.87)
		女性	49.50(11.50)	46.72(11.91)	46.77(11.36)
		男女込み	50.39(12.44)	49.25(12.69)	47.91(10.69)
	勤勉性	男性	45.34(8.41)	46.25(10.86)	52.14(9.99)
		女性	45.94(5.99)	46.57(9.61)	52.78(9.87)
		男女込み	45.61(7.38)	46.38(10.35)	52.46(9.92)
	協調性	男性	51.75(10.36)	54.77(11.34)	52.58(9.03)
		女性	51.95(10.10)	52.80(10.88)	53.87(9.09)
		男女込み	51.84(10.20)	53.96(11.18)	53.22(9.07)

め、結果的に大学生群は高校生群以外の18~25歳の全回答者数 ($n = 860$) からサンプルサイズが大きく減じた(約38.6%に縮小)。本研究では、前述のように高校生および大学生を対象とした調査研究での基礎データを得ることを主要な目的としていたため、以降は基本的にこれらの群間で尺度得点を比較した。大学生群と同年代の社会人等との比較については後述する。

作成したTBFを含む3種のビッグファイブ尺度について性差および年代群間の差を検討するために、男女込みの平均値も含め、性(男性・女性)×年代群(高校生・大学生・親年代)の6条件で各性格特性の平均値を示す(Table 3)。

まずTBFについて述べる。外向性においては、有意な交互作用は認められず、年代群の主効果のみが有意であった($F(2,966) = 8.45, p < .01; \eta_p^2 = .017$)。下位検定(TukeyのHSD検定による; 以下同様)の結果、高校生・大学生間に有意な差はなく、これら2群に較べて親年代群の得点が有意に低かった。神経症傾向には有意な交互作用は認められず、性の主効果($F(1,966) = 10.55, p < .01; \eta_p^2 = .011$)と年代群の主効果($F(2,966) = 27.19, p < .01; \eta_p^2 = .053$)がともに有意であった。平均値から、女性が男性よりも高かったと言える。また年代群の要因について下位検定を行った結果、高校生・大学生間に有意な差はなく、これら2群に較べて親年代群の得点が有意に低かった。同じく開放性には有意な交互作用が認められず、年代群の主効果($F(2,966) = 26.15, p < .01; \eta_p^2 = .051$)が有意であり、性の主効果に有意傾向が見られた($F(1,966) = 2.72, p = .099; \eta_p^2 = .003$)。性差については、男性が女性より若干高い傾向があったと言える。年代群の要因の水準間の差について下位検定を行った結果、高校生・大学生間に有意な差はなく、これら2群に較べて親年代群の得点が有意に低かった。勤勉性には有意な交互作用は認められず、年代群の主効果($F(2,966) = 2.99, p = .051; \eta_p^2 = .006$)が有意傾向だった。参考までに下位検定を実施したところ、有意な差が検出されたのは高校生・大学生間($p = .031$)のみであり、平均値から、高校から大学にかけて上昇傾向が認められたといえる。協調性にも有意な交互作用は認められず、性の主効果($F(1,966) = 14.98, p < .01; \eta_p^2 = .015$)と年代群の主効果($F(2,966) = 15.23, p < .01; \eta_p^2 = .031$)がともに有意だった。性差については、女性が男性よりも高かったと言える。年代群間の差について下位検定を実施した結果、有意な差が検出されたのは、大学生・親年代間のみであった。

次に同様の分析についてTIPIの結果を述べる。外向性に有意な交互作用および主効果は認められなかったが、年代の主効果に有意傾向が見られた($F(2,966) = 2.60, p = .075; \eta_p^2 = .005$)。参考までに下位検定を実施したところ、いずれの群間にも有意な差は検出されなかった(最も有意確率が小さかったのは、高校生・親年代間の $p = .054$)。神経症傾向に有意な交互作用は認められなかったが、年代の主効果($F(2,966) = 5.43, p < .01; \eta_p^2 = .011$)が認められ、性の主効果に有意傾向が見られた($F(1,966) = 3.34, p = .068; \eta_p^2 = .003$)。平均値から、女性が男性より高い傾向にあった。年代の要因の水準間の差について下位検定を行った結果、有意な差が検出された

のは、大学生・親年代間のみであった。開放性に有意な交互作用は認められなかったが、性の主効果 ($F(1,966) = 18.83, p < .01; \eta_p^2 = .019$) が認められ、平均値から、男性が女性よりも有意に高かったと言える。また、年代の主効果 ($F(2,966) = 5.56, p < .01; \eta_p^2 = .011$) が認められ、下位検定の結果、高校生群が他の2群よりも有意に高く、大学生群と親年代群の間に有意な差がないことが示された。勤勉性に有意な交互作用は認められなかったが、年代の主効果 ($F(2,966) = 39.04, p < .01; \eta_p^2 = .075$) が認められた。下位検定の結果、高校生・大学生間に有意な差はなく、これら2群に較べて親年代群の得点が有意に高かった。性の主効果は認められなかった。協調性に有意な交互作用および主効果は認められなかった。

さらに、同様の分析について特性語 BF の結果について述べる。外向性に有意な交互作用は認められなかったが、性の主効果が有意傾向だった ($F(1,966) = 3.81, p = .051; \eta_p^2 = .004$)。平均値から、女性が男性よりも高い傾向にあった。神経症傾向に有意な交互作用は認められなかったが、年代の主効果 ($F(2,966) = 16.79, p < .01; \eta_p^2 = .034$) が認められた。年代群の要因について下位検定を行った結果、高校生・大学生間に有意な差はなく、これら2群に較べて親年代群の得点が有意に低かった。性の主効果は認められなかった。開放性に有意な交互作用は認められなかったが、性の主効果 ($F(1,966) = 10.22, p < .01; \eta_p^2 = .010$) が認められ、平均値から、男性が女性より高かったと言える。年代の主効果には有意傾向が見られた ($F(2,966) = 2.51, p = .082; \eta_p^2 = .006$)。参考までに下位検定を実施したところ、いずれの群間にも有意な差は検出されなかった(最も有意確率が小さかったのは、高校生・親年代間の $p = .065$)。勤勉性に有意な交互作用は認められなかったが、年代の主効果 ($F(2,966) = 49.97, p < .01; \eta_p^2 = .094$) が認められた。下位検定の結果、高校生・大学生間に有意な差はなく、これら2群に較べて親年代群の得点が有意に高かった。性の主効果は認められなかった。協調性に有意な交互作用および主効果は認められなかった。

ここで検討した3種のビッグファイブ性格検査はすべて、性と年代の要因の交互作用が認められなかった。そこで、性の主効果および年代の主効果の有無の結果をまとめると Table 4 のようになる。

一般的に、ビッグファイブの性格特性においては、青年期から中年期にかけて神経症傾向が低下し、協調性や勤勉性が上昇するという傾向(「成熟の原則」)が知られている(Caspi, et al., 2005; 高橋, 2016)。比較的大きな日本人サンプルを用いて性差と年齢(20-70代)の効果を重回帰分析によって検討した川本他(2015)の研究では、協調性と勤勉性が年齢とともに上昇すること、協調性は男性よりも女性が高いが勤勉性に性差がないこと、外向性と開放性には年齢の効果が見られない一方、外向性は男性よりも女性が高く、開放性は女性よりも男性が高いという性差が見られること、神経症傾向は若い年齢で女性の方が高いこと、などが示された(性格検査はTIPIを使用)。

Table 4. 分散分析[性の要因(男性・女性)×年代の要因(高校生群・大学生群・親年代群)]の結果における各要因の主効果の有意性一覧：*は有意な効果あり($p < .05$), †は有意傾向あり($.05 < p < .10$), nsは有意な効果無し($p > .10$)を示す

要因名	性格検査	外向性	神経症傾向	開放性	勤勉性	協調性
性	TBF	ns	*	*	ns	*
	TUPI	ns	†	*	ns	ns
	特性語BF	†	ns	*	ns	ns
年代	TBF	*	*	†	†	*
	TUPI	†	*	*	*	ns
	特性語BF	†	*	†	*	ns

一方で、思春期年齢(12-18歳)の比較的大きなサンプルを対象としてYG性格検査の結果を分析した研究(Kawamoto & Endo, 2015)においては、神経症傾向的な特性が年齢とともに上昇する一方、支配性と社会的外向性が低下することが示されている。すなわち、学童期から思春期に移行する過程で一時的に不適応的な方向への変化が起こることが示唆されている。

本研究で対象とした若年層(15-25歳)は、思春期的な変化から成人期の「成熟の原則」に沿った変化が混在していると思われる、これが結果を複雑にしている可能性がある。このことも念頭に、以下、3種の性格検査の結果を概観する。

本研究で、外向性における先行研究(川本他, 2015; 齊藤他, 2001)と同様の性の主効果(女性が高い)を検出したのは特性語BFのみであった。一方、年代の主効果は3検査において有意もしくは有意傾向であるが、変動の様相は検査間で一貫していなかった。神経症傾向においては2検査で性の主効果が見られ、女性が高かった点は、川本他(2015)の結果の一部と共通していた。神経症傾向の年代の主効果は3検査とも有意であり、いずれも大学生から親年代にかけて低下する点は共通していた。この変化は成熟の原則を反映するものと考えられる。

開放性は3検査とも有意な性の主効果を検出し、すべてにおいて男性が女性よりも高く、先行研究(川本他, 2015; 齊藤他, 2001)の結果を再現していた。このように、開放性の性差は日本人サンプルにおいて比較的頑健と思われる。開放性の年代の主効果は3検査で有意もしくは有意傾向であったが、TBFと特性語BFにおいては高校生と大学生に違いがなく親年代で低下するのに対して、TUPIは高校生のみが高いという結果となった。こういった変動は先行研究(川本他, 2015)の結果と異なっているので、どの程度変化の様相が安定しているのかも含めて今後の課題となり得る。

勤勉性ではどの尺度も性の主効果を検出なかった点は川本他(2015)と一致するが、女性が

有意に高いという結果を得た齊藤他（2001）とは異なる。勤勉性の年代の主効果は3検査で有意もしくは有意傾向で、親年代が他の2群のいずれかまたは両方よりも高い点が共通していた。ここでも成熟の原理が反映されていたと考えられる。協調性について性の主効果も年代の主効果も有意に検出したのはTBFのみであり、女性が有意に高いという結果は先行研究（川本他，2015）と一致する。一方、大学生から親年代にかけての有意な低下は成熟の原理と逆の変化だった。以上のように、3検査すべてで確実に有意な効果を検出したと言えるのは神経症傾向における年代の主効果と開放性における性の主効果であった。また、3検査すべてで有意な効果がなかったと言えるのは外向性と勤勉性における性の主効果であった。

このように、本研究の結果は部分的に先行研究の結果と合致するものの、いくつかの側面では先行研究の結果と異なったり検査間で異なったりした。おそらく、前述のように若年層で年齢による変化が複雑化することに加え、各性格検査が測定している性格の内容が微妙に異なることが相互に作用して結果の違いが生じているものと思われる。この点については、年齢ごとの詳細な変化や各性格因子の下位因子をさらに検討するなどしてその原因を明らかにしていくことが今後の課題となろう。

18-25歳における職業状況等による差

ここまでは、若年群（15-25歳）を現在の修学中の学校カテゴリによって高校生群と大学生群に分け、親年代群を加えた3群での比較を行った。しかしながら前述のように、大学生の年代として扱った18-25歳の年齢群には有職者をはじめとする大学生以外の回答者が多く含まれていた。そこで、回答者の職業状況等の違いがどの程度それぞれの性格検査得点に反映されるかを見るために、選択した職業カテゴリによって18-25歳の回答者（867名）を3群に分類した。まず、前述の職業カテゴリにおいて「学生」を選択した351名（男性203名、女性148名）を「大学生」群とした。これに対し、安定的定常的な収入がある立場と思われるカテゴリ〔「会社勤務（一般社員）」、「会社勤務（管理職）」、「会社経営（経営者・役員）」、「公務員・教職員・非営利団体職員」、「派遣社員・契約社員」、「自営業（商工サービス）」、「SOHO」、「農林漁業」、「専門職（弁護士・税理士等・医療関連）」〕を選択した265名（男性128名、女性137名）を「安定した有職者」群とした。さらに、これら2群に含まれない回答者〔「パート・アルバイト」、「専業主婦・主夫」、「無職」、「その他の職業」のいずれかを選択〕である251名（男性97名、女性154名）を「その他」群とした。回答者の平均年齢は大学生群で20.27歳（ $SD = 1.84$ ）、安定した有職者群で23.22歳（ $SD = 1.69$ ）、その他群で22.86歳（ $SD = 1.89$ ）であった。これら3群の各性格検査の尺度得点の平均値を示す（Table 5）。

TBFはすべての尺度において有意な群間の主効果を示した。TIPIおよび特性語BFは同様にほとんどの尺度に有意な群間の主効果を検出した一方、TIPIの開放性と特性語BFの勤勉性にお

Table 5. TBF, TIPI, 特性語 BF の各性格特性における, 大学生 (S), 安定した有職者 (W), その他 (O) の3群間の平均値の差異 (18-25歳の回答者のみ); () は標準偏差

		大学生 (S)	安定した 有職者 (W)	その他 (O)	F(2, 864)	有意差	多重比較の結果
外向性	TBF	14.05 (5.55)	13.79(5.13)	11.71 (5.05)	16.119	**	S=W>O
	TIPI	6.85 (2.90)	7.25(2.86)	6.49 (2.68)	4.699	**	S=O, S=W, W>O
	特性語BF	46.62(14.87)	48.24(13.95)	44.27(13.71)	5.034	**	S=O, S=W, W>O
神経症傾向	TBF	18.57 (4.32)	18.29(4.59)	19.45 (4.21)	4.924	**	S=W<O
	TIPI	8.62 (2.51)	8.63(2.57)	9.57 (2.50)	12.320	**	S=W<O
	特性語BF	55.37(14.03)	54.67(13.92)	59.1(13.38)	7.794	**	S=W<O
開放性	TBF	18.17 (3.97)	17.00(4.27)	16.56 (4.56)	11.918	**	S>W=O
	TIPI	7.72 (2.58)	7.63(2.51)	7.59 (2.37)	0.211	ns	--
	特性語BF	49.36(12.47)	47.57(12.75)	45.90(12.49)	5.621	**	S>O, S=W, W=O
勤勉性	TBF	16.89(4.10)	16.22(4.21)	15.64 (4.47)	6.518	**	S>O, S=W, W=O
	TIPI	6.97(2.48)	6.9(2.44)	6.41 (2.62)	4.059	*	S>O, S=W, W=O
	特性語BF	46.27(10.19)	46.87(9.46)	45.83(10.52)	0.695	ns	--
協調性	TBF	18.02 (4.02)	17.46(3.80)	16.25(4.38)	13.990	**	S=W>O
	TIPI	9.38 (2.32)	8.98(2.27)	8.76(2.29)	5.682	**	S>O, S=W, W=O
	特性語BF	53.91(11.02)	52.25(10.63)	48.71(11.07)	16.836	**	S=W>O

* $p<.05$, ** $p<.01$

いて有意な主効果が示されなかった。また多重比較においても TBF は, 外向性, 開放性, 協調性で他の2尺度のいずれかに較べて群間差をより明確に示した。ここで設定した3群の母集団に基本的な群間差があるならば, TBF は群間差に比較的鋭敏な尺度であることが示唆される。TBFの結果によると, 外向性は大学生群と安定した有職者群とが同程度であり, その他群はこれら2群より低かった。神経症傾向は大学生群と安定した有職者群が同程度であり, その他群はこれら2群より高かった。開放性は大学生群が他の2群より高く, 勤勉性は大学生群とその他群のみに差があった。協調性は大学生群と安定した有職者群が同程度であり, その他群がこれら2群より低かった。これらの結果は全体に, その他群の性格特性が相対的に不適応的であることを示唆している。この群には, 何らかの事情で就学・就職が困難な者が含まれやすいと考えられ, 結果の一部はそれを反映するものと思われる。

まとめ

本研究で作成したビッグファイブの測定項目は、それぞれの性格特性尺度として内的一貫性が高く、心理尺度として大きな問題は見られない。内容的にも、各性格特性の特徴を反映したものとなっていると考えられる。既存の尺度との相関を見ても同一の性格因子間で著しく低い相関はなかったと言える。このことから、基準関連妥当性もある程度満たしているものと考えられる。従って、本研究で作成した尺度はビッグファイブ尺度として使用可能なものと評価できる。ただし、既存の他尺度と較べて因子の弁別性が低い可能性があることには注意が必要である。その一方、ここで比較対象とした既存の性格検査と比較して、いくつかの群間差については本研究の尺度がより鋭敏である可能性が示唆される。使用にあたってはこれらの特徴を念頭に置く必要があるだろう。また特に、高校生、大学生、その親年代ごとに示した基本的な統計量は、これらの年代を対象とした今後の研究に参考になるものと思われる。一般的に、ビッグファイブ性格特性の測定では、現在のところ研究の標準となる決定的な尺度が定まっていない状態と考えられるので、様々な検査の特徴を把握した上で、研究目的に応じて最も適切な検査を選択することが重要となるだろう。

引用文献

- Capsi, A., Roberts, B. W., Shiner, R. L., 2005. Personality development: Stability and change. *Annual Review of Psychology*, 56, 453-484.
- FFPQ 研究会, 1998. FFPQ (5 因子性格検査) マニュアル. 北大路書房.
- FFPQ 研究会, 2002. 改訂 FFPQ (5 因子性格検査). 北大路書房.
- 藤島寛・山田尚子・辻平治郎, 2005. 5 因子性格検査短縮版 (FFPQ-50) の作成. *パーソナリティ研究*, 13, 231-241.
- Goldberg, L., 1990. An alternative "Description of Personality": The big-five factor structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 1216-1229.
- Goldberg, L., 1992. The development of markers for the big-five factor structure. *Psychological Assessment*, 4, 26-42.
- Kawamoto, T., Endo, T., 2015. Personality change in adolescence: Results from a Japanese sample. *Journal of Research in Personality*, 57, 32-42.
- 川本哲也・小塩真司・阿部晋吾 他, 2015. ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性の年齢差と性差 - 大規模横断調査による検討. *発達心理学研究*, 26, 107-122.
- 村上宣寛・村上千恵子, 1999. 性格は五次元だった - 性格心理学入門一. 培風館.
- 大野木裕明, 2004. 主要 5 因子性格検査 3 種間の相関的資料. *パーソナリティ研究*, 12, 82-89.

- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ, P., 2012. 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究, 21, 40-52.
- 齊藤崇子・中村知靖・遠藤利彦 他, 2001. 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の標準化. 九州大学心理学研究, 2, pp.135-144.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之 他, 1999. NEO-PI-R, NEO-FFI 共通マニュアル. 東京心理.
- 高橋雄介, 2016. パーソナリティ特性研究をはじめとする個人差研究の動向と今後の展望・課題. 教育心理学年報, 55, 38-56.
- 和田さゆり, 1996. 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成. 心理学研究, 67, 61-67.